

大久野通信 vol.6

里山への道のり（続編）



ひな祭りを過ぎてまだまだ寒い日が続いています。大久野倶楽部の活動拠点は、相変わらず冬の風情ですが、間もなく新緑の季節を迎えます。同時に雑草たちで埋め尽くされますので、様相が一変します。少しでもこの風情を維持するには・・・それは寒さに負けずどれだけ汗を流すかに掛かっています。大久野倶楽部は、防寒服を着込んで山野整備に精を出しております。

INDEX

- ・熊笹との格闘
- ・遺構の発見
- ・天災の爪痕
- ・今後の展望

熊笹との格闘

活動拠点の周囲は、戦前に植林された杉が群がる山に囲まれています。林業が盛んであった頃は、枝打ちや下草刈りが行われていました。現在は、熊笹などが伸び放題。数メートルの高さまで成長した熊笹などにツル系の雑草が絡まって、なんと陰鬱な雰囲気醸し出しています。これを払拭してサッパリ夏を迎えたい、そんな思いで格闘しました。



格闘前の状態



格闘後の状態



沢に覆いかぶさる熊笹



刈り取った状態

遺構の発見

整備を進めてみると、先人たちの生活痕に出会います。山の裾野には石垣が巡らされており、何かの営みがあったことが想像できます。現地（東京都西多摩郡日の出町）は、渋谷がまだ村だったころ、既に町を名乗っていたのだとか。林業で栄えたこの地域は、石油の登場で元気を失ってしまいました。ところが昨今は脱石油です。何か因縁の様なものを感じてしまいますね。



嘗て整備されていたのであろう痕

天災の爪痕

現地周辺では、石垣をよく目にします。いまはコンクリートによる法面が当たり前ですが、昔は石垣が主流だったのかも知れません。専門の職人さんたちも居たのでしょう。時間の経過で成長した木の根などは、石垣を裏から押し出そうとします。そこに地震や集中豪雨が追い打ちを掛け、脆いところから崩落が発生しています。石垣の崩落は、土石流など深刻な被害に繋がりますので修復が必要ですが、それには重機などが必要です。さてどうしたものか・・・そこで、三六会の方々に指導をいただき、伐採材を活用した土留め作りを学びました。表皮を剥ぐと腐りにくい、軽く焼けば虫が付かない、等々知恵も教えて頂きました。



崩れてしまった石垣



伐採材を用いた土留め

今後の展望

木材を利用して、コンクリートにはない温もりを感じる土留めが完成しました。耐久性は劣りますが、間伐材を有効活用するところに価値があります。今後、廃竹を用いた竹炭作りにもチャレンジします。山野整備でも循環を考える、間伐材や雑草などを活用する道筋ができれば、山野は資材の宝庫に変わります。大久野倶楽部のチャレンジは、まだまだ続きます。